

航米日録 卷七



【インドネシアのアンシャホエン港出航から、香港を經由して帰国まで】

注意：現代語訳の作成に当たっては、以下の点について心した。

- (1) 「日本思想大系 66 西洋見聞集」(岩波書店,1974年12月)記載の「航米日録」(沼田次郎氏(東大名誉教授)校正)をほぼそのままに現代語に変換するよう心掛けた。
- (2) 玉虫自らが注意書きした箇所は()内に示した。
- (3) 地名、呼名については、沼田次郎氏の校正註を基に現代語に変換した。沼田次郎氏の校正註は《 》内に記載した。
- (4) 校正註について疑問がある点、或いは読者の利便を考えた註を筆者(菅原)の独断にて付加した。それを【 】内に朱記にて示した。
- (5) 2月2日午後6時頃に、東経から西経へ日付変更線を通じたので、日にちを減ずる必要があるが、そのままになっているので文中の曜日が合わなくなっている。このため筆者(菅原)が日にちを修正した。尚、玉虫の日付を【 】内に緑記した。又、旧暦と新暦の対応は、筆者(菅原)が付加した。

旧暦万延元(1860)年8月15日(新暦9月29日) 【8月16日】快晴、 東の風。

昨夜「アンシャホエン」に停泊し、食品を買う。数十艘の小船が来るが、全て丸木舟である。その積み入れ品は、鶏、アヒル、南蛮瓜(とうなす)、南蛮黍(とうもろこし)、椰子、橙柑の類である。中に一つの珍しい果物があつた。形は

へたの所が  で、頭の所が  の様な球形であり、色は黒赤、味は甘美であり、米国名をマメヤアフルス《Mamee Apple: 【アズキ色の厚い革質の皮と水分の多い黄色いか赤みがかつた果肉をもつ球状か卵形の熱帯性果物】》と言うものである。さてこの辺りの人物は、毛髪が黒く、顔色は中国人に似ている。歯は黒くて染めた様な感じである。衣服は連縫(ぬいつめ)の筒袖の着物で、胸の部分が僅かに開いたもので、扣紐(ボタン)で合わせる様にしている。着る時は首から被る。その他に通常の筒袖の着物もある。腰下は股引或いはふんどしを身に付け、頭に更紗の布、又は日本の僧侶が被る笠の様な物を被っている。その立ち居振る舞いは、ルアンダ人に比べれば少しは粗暴さがなくなっている。言語は、多くは英語を話し、良く事をわきまえている。午前8時過ぎに碇を揚げて、東北に向つて航行する。南にジャワ山を望み、北はスモタラ岬《Sumatra: スマトラ》を望んで、航行するに従つて、景色が急に変わる。この景色を見て、【過ぎ去つた】長い月日の鬱積を晴らす。航行すること数里で小島が点々とし、皆樹木が繁茂している。それら

の島々は大抵平地で山は無い。大きな島は周囲が一・二里、小さいものは六・七町、一島を過ぎるとまた一島が現れ、その数を数えることが出来ない。或る説によると、三百余島があるとの事。その風景は、日本の松島に似ている。夕方になりバタビア《Batavia：今日のジャカルタの事》近くに来た。この辺は暗礁が多く、夜中に測量することが出来ず、暫らくこの所に停泊する。夜、月光が美しく輝き、諸島が分散して見え、実に絶景である。夜8時過ぎ、音楽を演奏する。常日頃は音楽を聞いて【海上での寂しい】心を慰めることもあるが、今宵は月色に心を奪われたのか、音楽が徒に耳にかまびすしく聞こえる。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年8月16日(新暦9月30日) 【8月17日】晴、 東の風。

又、東北に向う。二時間程でバタビア港《ジャカルタ》に着いて停泊する。この港は極めて广大で、海門が東北に面し、数十の小島が基石の様に点在している。数多くの現地人の船がその間に列を成して係留されている。陸上には燈台が高く聳え、樹木の中に家屋が軒を連ねているのが見える。首都から八里(日本の三里余)離れた所に、所々砂洲があって、大型の船舶が岸に接岸できない。日本の品川港を思い出させる。碇を下ろしたとき、日米両国の国旗を高く掲げた。現地の役人と見える人が小船で一・二人来た。午後に音楽を演奏し、且つ船中の全員が、常時とは異なって衣服を着替えた。

○寒暖計82度 【27.8℃】 ○昨夜アンシャホエンで碇を揚げてからバタビア港《ジャカルタ》迄70里○南緯6度08分○東経106度50分

旧暦万延元(1860)年8月17日(新暦10月01日) 【8月18日】晴。

滞留【ジャカルタ】。この地で、日本の使節を饗応するとして祝砲21発を鳴らした。これは丁重なる饗応の礼式である。これに应えてこちら側も祝砲を発し、船中で各人が礼服を着用した。午後にオランダ人数人が来た。午後4時過ぎに、又祝砲が13発鳴った。炎熱のすごさは船中と言っても流汗を拭うに暇がない程である。日本の三伏(夏季極暑の期間)の日でもこの様に暑さが甚だしいことにはならない。夜、遠雷が鳴り雷光が頻りにひらめいて、にわか雨が降るが炎熱を払拭するには至らない。

○寒暖計87度 【30.6℃】

旧暦万延元(1860)年8月18日(新暦10月02日) 【8月19日】晴。

滞留【ジャカルタ】。オランダ人等が頻りに来た。炎熱で燃える様である。


○寒暖計88度 【31.1℃】

旧暦万延元(1860)年8月19日(新暦10月03日) 【8月20日】晴。

滞船【ジャカルタ】。午前8時頃、御奉行等が上陸し、同所の東インド総督《Charles Ferdinand Pabud》の居宅を訪問した。自分も随臣ではないが上陸した。但し、今朝6時(日本の六ツ半時に相当)に東インド総督関連の士官が四・五人乗込んだ河川蒸気船で迎えに来た(船名はヨハンと言ひ、30馬力である)。7時頃御奉行等が乗り移られ、二里余で川口に至り、又遡ること一里弱で上陸した。側に砲台があり、祝砲21発を鳴らした。陸上には騎馬隊・歩兵隊が装備して警護する。御奉行等が上陸し、直ぐに車に乗ったが、船長がこれに付き添った。その列には、先頭に小砲隊20人、楽隊10人、騎馬隊10人程、その次に御奉行等が順に並んで、最終列に小砲隊20人、騎馬隊10人程が警護として行進する。自分は随臣ではないので、その後から上陸した。2時間程して一つの店に入り休息した。この店は酒を売る所で、家の中央にビレタイホ《ビリヤード》と言う玉突き台などがあり、二三人の男子と一人の婦人が遊んでいた。日本の茶屋である。自分達を一目見ようとして異風の人達が戸外に立ち並んでいた。米国人とは異なり、敢えて握手する人は居ない。尤も、婦人は更に近づく事もせず、日本人を思い出させる。この場所で車を雇い、一里ばかり行くと広い道があり左右に分かれて路傍に並木がある。倉庫があり、これを過ぎると高さ三間弱の門があり、門の左右に居丈高の人物が槍を持っている姿を木で作ったものがある。又、門の上に小砲隊の人物を彫刻し、左右三人ずつ並べて建てている。門外に黒人が一人居てこれ等を護っている。これは日本の見付番所の類であろう。ここを過ぎ一町ほど行くと、一軒の大きな家があり、恐らく役所の類であろう。門外に常時歩卒が居て警備している。又、左折して少し行くと市街となり、それらは皆オランダ館である。ここから橋を渡ると中国館で、家の作りは大抵日本と同じである。高いものでも二階建てで、店の前面は皆漢字で物品名を記してある。戸外に「五福臨門」などと記したり、或いは聯句を記した一片板を掛けている。これは日本のお守りの類であろうか。この様な家が数十軒並んで建っている。市街中央に出ると、左に《中国周代の》文王の社と見え、門の左右に文王の二字を記した大提灯が掲げてある。ここを過ぎ三・四町行くと左に川があり、雨後の水の様に汚れている。右には堂々とした大きな家があり門扉で出入している。何れも白い漆喰を塗り、非常に美しく、日本の寺院の様である。又、七・八町行くと門上に白公祠と記した額を掛けたものがあり、思うに中国楚の白公を祭ったものだろう。ここから一里ほどでホテルに着く。ホテルの名前はデス・インテス《Hotel des Indes》と言う。御奉行等は東インド総督の居宅を訪ね、既にホテルに居た。このホテルは門の正面から三十間程離れた所に建物があり、前五・六間ほど、奥二・三間で出入口がある。

ここを入れれば一部屋、一部屋と都合三部屋に区切られ、その左右に小部屋がある（その数の詳細は分からない）。何れもレンガを敷き、各部屋に椅子を設置している。奥の二部屋には常に大きなテーブルを中央に置いてある。部屋の前は風雨を覆う所が無く、至って快活である【バルコニーのことか】。旅客は常にここに来て飲食する。ここは客を待遇する所だと言う。その左右に長屋があり、各々二十間余で、右の長屋の中程から少しばかり離れた所に浴湯所がある。そこは円形で周囲五・六間、中央を高くして湯気を洩らす小窓がある。浴場六箇所、各々戸が有



って出入のときは必ず鍵を掛ける。その形は  の様である。又、客を持って成す待遇所の後に、右に沿って調理場と馬小屋がある。その前より少し離れて又、二十間ばかりの長屋がある。この長屋の角にホテルのオーナーが住んでいる。その他は皆旅客の宿泊所である。大抵、一部屋は一間半から二間の大きさである。椅子並びにベッドを配置し、床には皆レンガを敷き、その上にアンペラで作った花蓆（はなむしろ）を敷いている。これらの長屋は皆平屋で二階はない。又、待遇所の後の左に浴湯所がある。長さ二十三間で浴場が三個ある。皆石を積んで作り、その上に銅管があって水湯を注ぎ入れている。その機巧は米国の物を思い出させる。さて、御奉行等の饗応のため、当地の総督が酒肴を出したが、その盛大なことは種類が既に三十に及んだ。食い残りの食べ物が我等にも回ってきて、酔っ払ってしまうに十分であった。米国出帆後の抑鬱を始めて払拭した。午後にホテルの近所を二・三町程散歩した。左右皆商館で、右はオランダ商館、左は中国商館で混じり住んでいる。諸物の高いことは米国の倍で、腕組して見るのみである。午後4時頃ホテルを出て、前に行った道をなぞり、夕方に船【河川用の蒸気船】に乗り移る。波濤が高くて船が小さいため、皆困却した。午後6時頃漸くナイアガラ号に着いた。

○寒暖計87度【30.6℃】

旧暦万延元(1860)年8月20日(新暦10月04日)【8月21日】晴。

今日は石炭の積み入れのため、船でネヒヤールト《Navy yard : 海軍造船所》に行く。午前8時過ぎから碇を揚げる。河口から六里の場所との事である。暫らくして着岸する。日々蒸し暑く、流汗滴々で、夜半になっても尚同じ様な状態である。その困苦は甚だしいものである。

ネヒヤールト情勢

ネヒヤールトはバタビア川から西南に六里の場所にあり、二つの小島からなっている。一島は器械製造所、一島は石炭貯蓄場である。ナイアガラ号がこの場所に

来て停泊する。その周囲は僅かに七・八町で、石炭蔵一棟、砲台一個、火薬蔵一棟、役所一個、他に番人の居所と思える粗略な家が一軒ある。砲台は円形でレンガを積んで作ってある。外壁は皆黄色の漆喰で、高さ三間、厚さ八尺で、周囲上下に砲窓があり、海面に面している所は左右斜めに砲窓を作っている。この所に数砲が集まり砲撃するためだろう。又、出入戸の所も左右斜めに砲窓を設けている。極めて堅牢である。火薬蔵は方形で前一間半、横二間程で前後に小窓が二個ある。高さ二間、厚さ六・七尺で、三重の扉を設け、周囲に土塀を築き、常に門戸を閉じて部外者の出入を許さない。その作りは最も堅実である。役所は小さな建物で、常には使用せず、事ある毎に使用するとの事である。もう一つの小島には器械製造所並びに砲台があり、常時罪人を収容し、仕事や職業訓練をさせている。現地人はこの島を称してヲンリストアエランド《オンルストエイラント Onrust Eiland》と呼んでいる。ヲンリストとは不穩の意味である。昔、オランダ人が初めてこの地に来たとき、この島を根拠とし、その後ジャワ島全体を奪領した。そのため現地人は今でもこの様に呼んでいるとの事である。尤も、オランダ人もこの島が要害の地であることを知り、ネヒヤールトを建設して非常時に備えている。

○寒暖計89度【31.7℃】

旧暦万延元(1860)年8月21日(新暦10月05日)【8月22日】晴。

滞船【ジャカルタ】。石炭の積み入れを行う。午後、オランダ人と中国人が婦人を伴って来る。炎熱が烈しい。

○寒暖計90度【32.2℃】

旧暦万延元(1860)年8月22日(新暦10月06日)【8月23日】晴。

滞船【ジャカルタ】。石炭の積み入れを行う。又オランダ人と亜刺比亜(アラビア)人が来る。夜、雷雨があり、炎熱を払拭するのに十分である。

○寒暖計88度【31.1℃】

旧暦万延元(1860)年8月23日(新暦10月07日)【8月24日】晴。

滞船【ジャカルタ】。石炭の積み入れを行う。夜、雷雨がある。さてこの小島に時々上陸するが、海岸に松葉に似たもの、きのこに似たもの、或いは菊花に似た奇石が多い。始め数百の石を拾ったが、船中に収納する場所が無いため、止むを得ずその内で最も奇なるものを選んで、僅か七・八石を持ち帰った。

○寒暖計89度【31.7℃】

旧暦万延元(1860)年8月24日(新暦10月08日) 【8月25日】晴。

今日になって石炭の積み入れが終わり、ネヒヤールトから帰る。バタビア川から一里程離れた場所に停泊した。午後再び上陸し、又前路を通る。帰船は午後6時過ぎになった。雷雨がある。

○寒暖計87度【30.6℃】

旧暦万延元(1860)年8月25日(新暦10月09日) 【8月26日】晴。

滞船【ジャカルタ】。午後当島の総督が来る。船上で祝砲を鳴らし饗応して音楽を演奏する。船中で各人服を着替える。

○寒暖計88度【31.1℃】

旧暦万延元(1860)年8月26日(新暦10月10日) 【8月27日】曇、午後小雨、東の風。

午後2時過ぎに碇を揚げ、東北に向う。蒸気機関を作動させているため煙が雲の様にたなびき、如何にも勇敢に見え、船の速度は最速である。夕方になりバタビア諸島は遠く小さく見え、まるで雲の様である。夜、波濤は静かである。炎熱は烈しいけれども、船足が速いため冷気が吹き、少し涼しく感じる。

○寒暖計87度【30.6℃】


バタビア情勢

ジャワは七州二十一郡からなり、バタビア《現在のジャカルタ》は北岸の海港である。一名、チャカタラ《16世紀の始めはSunda Calapaと呼ばれていたが、回教徒がCalapaを征服後にJacartaと改められた。外国人がこれを訛ってJacatraと呼び、日本ではジャガタラと呼ばれた》と言う。ティリウオンク《チリウン:Tijliwong》と言う川があり、その河口に長さ一里余の石堤を左右に築き、波濤を止めて石沙が入らない様にしている。そのためその間は深く、運送船が自由に往来する。堤の上に灯台があり、往来の目印としている。左右に砲台があり、土堤を高く築いており、これは日本の砲台の作りに似ている。砲台から二・三町離れた所に監察所があつて、船の往来を監視している。右には中国人の家があり、周囲に低い垣根を作り、門があつて出入している。その作りは風雅である。上陸する所には所々に栈橋があり、岸頭に長さ七・八間の家がある。これは荷物揚場であり、その管理は嚴重である。港門は東北に面し、非常に広い。港外に数十の小島が散在し、強烈な風や津波【原文「颶風海嘯(ぐふうかいしょう)」】などの心配が無く、船舶の停泊場所としては最上の所である。現在では、諸外国の船が数多く停泊し、日々に入出する。或る書物に拠れば、港内に1200艘が停泊していると言う。その昔、英兵にその地を奪われ、一朝にして寂寞の地となったが、オランダ人が色々と手

を入れて漸く現在の隆盛な港になった。全島の酋長がこの島で内外の政令を発した(訳書では、1601年以来、英人がこの島を奪領した。そのときオランダ人は、バタビアの西にあるバンタムと言う所で強力な勢力を張っていて、英人を追い払い自分の領地とした。この争乱で家屋が破壊され、城市が悉く烏有と帰した。オランダ人が新たに造築して、1619年から追々回復させてきたが、1811年に英人がここを奪い、1816年に再びオランダ人へ返還したと言う事である。この様に、兵火や地震に逢い、昔は人口が16万人も居たが、大幅に減少して寂しい街となった。オランダ人が種々の工夫をして漸く現在のバタビアにした。)。街の一区画は非常に広く、道路は整正で、学校・病院・芸術館・寺院・音楽堂等全て欠けたものはない。又、道路が通っている場所には、劇場・曲芸所・骨董店等が立ち並んで、常時人が集まっている。中国人とオランダ人は住居区を分け、長いものは四・五町、短いものは二・三町で、その間に寺院・神社等があつて樹木が森々としている。街区の左右に多くの樹木を植え、日光を遮っている。これは炎熱を避けるためであろう。また所々に小さな堀を設け、地面の汚湿を洗い流し、庶民が伝染病に掛からない様にしてしている。この様にして日々を追って繁華となり、オランダ東インド領中第一の所となった。人口11万8300人(訳書には、欧州人2800人、中国人2万5000人、現地人8万人、アラビア人1000人)である。

風俗

オランダ、中国、アラビア、現地人の交雑の地なので、各々風俗は異なる。○現地人は顔面・毛髪共に皆黒く、アフリカ人に比べれば少しは薄い。衣服は筒袖の着物で、長いものは膝まで、短いものは腰までである。皆草木の花を染めたものや或いは白木綿を用いている。胸先はボタンで合せるか、又は無縫の片布を三重に腰に巻いて前で結んでいる。日本の帯に似ている。着物は大概左前【左衽(さじん)】に着ている。又筒袖の着物の周囲を縫い合わせて、着るときに首から被るようにして着るものもある。腰より下は股引を用いる。その上から腰巻を巻く。長いものは踝まで、短いものは膝まで来る。首には風呂敷の様な物を被り、額の前で結ぶ。皆草木の花を染めた布を用いている。又、下僕は唯筒袖の着物と腰巻のみで股引は用いていない。その容態はルアンダ人に似ている。又、羅紗の筒袖の着物に股引を用いる者も居る。その作りは大概米国と同じである。肩より脇の下に至るまで、幅二寸程の袈裟の様な物を掛け、胸に当たる所は真鍮で出来た長さ三寸、横二寸程の物に文字を記した物がある。横文字を読むことが出来ない。【この服を着ていたのは】この地の兵卒である。大概裸足で、草履を用いる者は少ない。女性もまた男性に準じて装いは至って粗末である。首には風呂敷の様な物を被ったり、或いは髪を束ねるのみである。○中国人は、顔及び毛髪等、日本人

に似ている。首は中央に切り髪周囲二寸程を残してその他は全て剃り落とし、その長さは腰を超えるものである。もし短髪な者は糸で接続している。まるで組紐の様である。髪は常に背後に垂らし、事あるときは首に巻き付ける。これは即ち弁髪である。帽子は絨(じゅう)と呼ばれる地の厚い毛織物で作られ、その形は円形で頂上に括り付けられている。その括り付け部分は高くなり、小さな円となっている。これは飾りのためであろう。全ての帽子は小さくて、僅かに頭の中央を覆うのみである。衣服は筒袖の着物で、白木綿或いは羅紗を用いている。股引は、米国等のものに比べれば、少し緩やかである。襟は狭くて首の所で止まる。全て胸先でボタンで結合している。ガラス・木実或いは黄金等で飾りを作っている。その長さは腰下或いは膝下に至り、必ずしも一ではない。前後にひだを付けず、日本の丸羽織と同じである。腰下には股引を用い、又、革靴を履く。下僕は白木綿の筒袖の着物と草鞋を履くか裸足である。寛いで休むときは、殆ど裸を好む。日本の下僕と同じである。女性の服も筒袖の着物で非常にゆったりとしている。長さは腰下かふくらはぎの下まであり、必ずしも一つではない。腰下には股引を用い、その上に腰巻を纏う。頭は全髪を堅く束ね、後で結んでいる。かんざしとこうがい《簪笄(しんけい)》で飾りとしている。顔に紅粉を塗り、歯を黒くしている。これは日本と同じである。○アラビア人は頭に巨大な布を被り、中央は中国の帽子の様にし、左右長い所は頭の周りへ幾重にも巻きつけ、日本の槍丁が帯を纏うような感じである。衣服は永さが踝までくる白木綿の筒袖の着物を下に着て、その上に袖なしの襦袢に数種類の刺繍が有るものを着て、胸先でボタンで合わせている。非常に美しい。又その上に長衣を着て、前を開けて合わせない。これは筒袖の着物であるが、腕半分の所で二つに別れ、辺端を金色の糸で刺繍し、その裾が踵まで達している。左右少しばかり分かれていて縫い取りがある。全ての服が日本で俗に用いるカイトリ《婦人のうちかけ》に似ている。履(くつ)は日本の草履の様で鼻緒があり、その中央に幅一寸程の革を左右に廻して足が回らない様にし、履の先端に  の様なものが有る。何のためのものかは分らない。履は三重で非常に美しい。女装は見ていない。或る説によると、大抵、男装に同じとの事である。○オランダ人の服装は男女共に米国人と変わらない。家の作りも又各々違っている。オランダ館の高さは二階から三階建てである。レンガを用いている所は少なく、多くは木角で出来ている。屋根は赤瓦で葺いている。棟は高いが、四簷《しえん：ひさし》は非常に低い。周囲は白い漆喰を塗り、窓と格子は皆ガラスで出来ている。市中の店は外部をガラスで作り、内部に数種類の奇品をガラス箱の中に置いてある。その作りは殆ど米国と同じである。中国人は木材で家を作り、屋根は赤瓦或いは椰子の葉・茅で葺いている。家の周りに低い垣根

があり、門戸を作りそこから出入する。その作り・配置は風雅である。オランダ館にも同様の作りがあり、門上に漢字の大額を高く掲げている所がある。これは寺院であろう。市街の店前では数種類の器を陳列したり、窓に漢字で物品名を記している。店内には席を設けず、レンガの床のみ、棚の上に数品を陳列している。道路の往行には車を用いている。その作りは米国と同じである。行商は大抵、天秤棒で荷物を担いで行く。大きな通りの地には必ず数種類の食物が並び、座って商売している。又、劇場・曲芸等があつて大いに繁盛していて、殆ど日本の風俗に似ている。しかし、人情は純朴ではなく、他国の人を侮弄している。諸国交易の場所であるため、自然に利に敏(さと)く、少しの損も出るのを恐れ、至つて狡猾である。今、自分達が上陸したとき、現地人で巻タバコをくれた者が居た。親切の事と思い辞退せずに貰い、そのまま帰つたが、翌日になつて券札を持って来て、そのお金を支払うように厳しく要求してきた。又、自分達の服装が現地人のものと変わっているのを見て、道路で嘲り笑う。甚だ失礼である。考えるに、昔はこの様な非礼な人間ではなかったが、後世に亘つて他国の人間と交流するに及んで、性格が変質していったのだろう。恐るべき事である。

気候

南緯6度08分、東経106度50分の地であるので、年中日本の夏の様で、四季は無いと言う。昔から伝染性の熱病の発生が多く、又、大地震があつて人口が減少して行つた。今ではオランダ人の考えに基づいて熱病を避け、疾病を防止し、漸く良地となつて前記の様な心配は無くなつた。唯炎熱が甚だしく、年中綿入れを着ることは無い(訳書に、年中中度の暖は78度3分、冬は78度1分、夏は78度6分、午後の温度は80度から90度以上になり、夜は70度で暑さは少し減少する。2、3月から10月に亘り好天気、気候は甚だ穏やかである。その外の月は、晴曇風雨不定である。地震・風雨が多く、時として暴風があり、船が流されることがある)。自分が入港した時は、西暦で言う10月であつたが、炎熱が甚だしく寒暖計が90度になつた。船中でも流汗を拭うのに暇が無い。夕方から時として雷雨が降り、炎熱を一掃する。少し気晴らしになる。畑の野菜は、胡瓜・ナス・インゲン・ポタンナ・スイカ・ザボン・大根の類であり、船中に持ち込まれるのを見る。日本の【旧暦】六月の様である。その炎熱の凄さはこれで分るであろう。

草木

草木は色々の物が多く、逐一記載することが出来ない。先ず目に付くものとして、椰子・芭蕉が最も多い。又、幹はシュロの様で葉は芭蕉の様に数葉が連なつて羽扇の様なものがある。又、日本のネムの木に似たものがある。道路に桑の葉に似

た木を植えて常に日光を遮っている。日本の菩提樹の様である。何れも名前を聞こうとしたがその暇が無かった。その他に、松・竹がある。松は日本の五葉松の様で葉は少なく長く、竹は節が薄くて女竹の様である。又、籐があり、多くはザルに使用する。その他に色々有るが一々枚挙は出来ない。

鳥獣

鳥獣は多く居るとの事であるが、多忙で探索することは出来なかった。船中に持ち込まれたものには、牛・豚或いは鶏・アヒル・七面鳥がある。カラス・トビ・ツバメ・スズメも居ると言われているが、自分は未だ見ていない。唯、海上に頭が白く羽が赤黒の斑のトビに似た鳥が居る。犬・猫は日本のものと同じである。犬は至って小で、大きいものは一つも見ない。馬も小さくて高さは大鹿と同じである。常に車を引いている。力は非常に強く、四人乗りの車を二頭で引き、あつと言う間に二・三里走る。牛は大抵日本に居る牛の大きさと、角は日本のより少し大きい。

貨幣

この土地はオランダの領地であるため、オランダ紙幣・銀貨が通用する。銀貨は2ギルダー半から1/5ギルダーまでである。又銅銭も色々種類がある。米国の1ドルはこの地の2ギルダー半に相当する。この関係を基にすると1ギルダーは40セントに相当する。金貨については自分は未だ見ていない。

物価

この地の物価は甚だ高い。オランダの物は本国から輸入している。値段は非常に高く、日本の銀貨で簡単に買えるものではない。

- 一 呉呂服三尺 1ドルから2ドル (呉呂服(ごろふく):オランダ語 Grof grein、粗い生地 of 毛織物)
- 一 アンペラー一枚 大きいものは2ドルから50セント、小さいものは25セントから20セント (アンペラ: 藺草(いぐさ)で編んだむしろ)
- 一 砂糖一斤 50セント
- 一 日本醤油一瓶(三合) 25セント

旧暦万延元(1860)年8月27日(新暦10月11日) 【8月28日】朝晴、午後雨、東の風。

又東北に向う。午後船の左右に数十の小島が点在するのを見る。夕方になっても同様の風景である。夜午後8時過ぎに海上に停泊する。この辺りは島嶼

が多く且つ暗礁があるため、停泊し夜の明けるのを待つと言う事である。夜、午前0時過ぎに小雨が降る。

○寒暖計84度【28.9℃】○昨日碇を揚げてから今日の正午迄160海里○南緯3度36分○東経107度18分

旧暦万延元(1860)年8月28日(新暦10月12日)【8月29日】曇、時々驟雨、北東の風。

今日になって北に向う。逆風で帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関で航行する。午前8時過ぎ、船の左舷に小島が見え、その側に大船一艘が暗礁に乗り上げて破砕しているのが見えた。遠見で詳細には分らないが、マストが今に残っている。暗礁の恐るべき事はこの様で、この光景を見て思わず戦慄する。午後驟雨が降る。この辺りに来て波濤が静かになり、平路の様である。唯憂うべきは、小島が点在していて時として暗礁すると言う事である。夜午後6時頃俄かに暴風が吹き、船中大騒動となる。暫らくして止む。

○寒暖計84度【28.9℃】○正午迄135海里○南緯1度30分○東経107度13分

旧暦万延元(1860)年8月29日(新暦10月13日)【9月01日】晴、西北の風。

今日は、北より少し西【北北西】の方向に航行する。これは暗礁の憂慮を避けるためである。午前8時過ぎ、帆を揚げたが風が弱くて十分に航行出来ない。唯波濤が静かで船足は速い。午後2時過ぎに驟雨が降る。夕方過ぎに一天雲無く、全天の星が爛々と輝いた。この辺りは炎熱が烈しく、時々雨が降って少し涼しくなる。夜、風波が穏やかで、午前0時過ぎに驟雨が降る。今日、赤道を通過した。

○寒暖計85度【28.9℃】○正午迄188海里○北緯1度05分30秒○東経106度44分

旧暦万延元(1860)年9月01日(新暦10月14日)【9月02日】晴、午後曇、東北の風。

今朝から北に向う。午前8時頃左舷に島嶼が点々として見える。午後海上渺茫(びょうぼう)として物が見えなくなった。午後4時過ぎ、驟雨が降って炎熱を緩和する。夜になって波濤が少し高くなり、船が揺動する。

○寒暖計86度【30.0℃】○正午迄180海里○北緯4度15分○東経106度51分

旧暦万延元(1860)年9月02日(新暦10月15日)【9月03日】曇、時々驟雨。

今日から北より少しばかり東【北北東】に航行する。午前8時過ぎ、米国の商船一艘に出会う。互いに船号を唱え、暫らく談話して別れる。その船は蒸気船ではなく、帆力のみで航行する。この辺りは風が静かなので、空しく海上に漂流している。日本人は短気なので、その様な船に乗ったならば、さぞかし気を揉

むであろう。しかし、彼等は悠々としてその様な状況を気にも留めず、婦人などを乗せて航海を楽しんでいる。これを見て【玉虫は?】恥ずかしくて顔が赤らんだ。午前10時過ぎに驟雨が降ってきた。その後は晴れたり雨が降ったりである。船の左舷に大船一艘が見えるが、遠くて何国の船であるか分らない。夜になっても、晴雨不定である。

○寒暖計85度【29.4℃】○正午迄194海里○北緯7度24分○東経107度11分

旧暦万延元(1860)年9月03日(新暦10月16日)【9月04日】晴、午後2時過ぎ驟雨、東北の風。

又、東北に向う。午後2時過ぎ、夕方、俄かに東風に変わり、帆を揚げて航行する。船足非常に速い。夜になり冷風が吹いて炎熱が少し減少する。今日は波濤が高く、船が揺動する。

○寒暖計85度【29.4℃】○正午迄194海里○北緯7度24分○東経107度11分

旧暦万延元(1860)年9月04日(新暦10月17日)【9月05日】晴、午後驟雨、東北の風。

又、東北に向う。逆風で帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関にて航行するが波濤が高く、船足は速くない。右舷に英船一艘が見える。夜、遠雷、雷光が光る。炎熱が烈しい。

○寒暖計87度【30.6℃】○正午迄135海里○北緯10度57分○東経110度18分

旧暦万延元(1860)年9月05日(新暦10月18日)【9月06日】晴、北東の風。

又、北東に向う。この辺りは波濤が漸く静かになり、船足は非常に速い。夜になり、冷風が吹いて炎熱を緩和している。遠雷、雷光が光る。

○寒暖計85度【29.4℃】○正午迄176海里○北緯13度19分○東経112度04分

旧暦万延元(1860)年9月06日(新暦10月19日)【9月07日】曇、時々驟雨、東の風。

又、北東に向い、横帆を揚げて航行する。夜明けに驟雨が降り、涼しさを催す。その後、雨が次第に烈しくなり、部屋の湿気が甚だしく、衣服類が水に浸った様な感じである。この辺りは右にマッカレス《Macclesfield Bank: マッククルズフィールド堆》、左にフラッセル《Praters Cliff: プラッターズさんご礁》を控え、その間の距離は僅かに一度位で、昔から難所と言われている所である。午後になりマッカレスを過ぎる。満天に雲がむらがり、にわか雨が降る。波頭が特に高く、少しばかり心配になる。夕方になり漸く両礁を過ぎ、大いに安心する。夜波濤高く、船が頻りに揺動する。

○寒暖計84度【28.9℃】○正午迄175海里○北緯16度06分○東経113度

旧暦万延元(1860)年9月07日(新暦10月20日)【9月08日】晴曇不定、東北の風。

又、北東に向う。この辺りは風が無いが白波が高く、あたかも天を蹴る様である。このため、蒸気機関の力は十分であったが船足は速くは無い。夜になって波濤が少し穏やかになり、船の揺動は少し緩和された。この辺りに来て少し冷気を感じる。日本の【旧暦】八月の気候である。

○寒暖計84度【28.9℃】○正午迄166海里○北緯18度45分○東経113度49分

旧暦万延元(1860)年9月08日(新暦10月21日)【9月09日】晴、東北の風。

又、北東に向う。波濤が高く船足は速くは無い。午前8時頃、右舷に大船一艘を見るが何処の国の船かは分からない。午後に船の左右に漁船が点在するのが見えた。その数はどの位なのか分からない。まして陸地に近い所に行ったら、どの位のほどになるのか。午後2時過ぎ、左舷に六・七島が微かに見える。午後4時頃になってはっきりと見えるようになった。その内の一大島、遠く見えるのはマコウ島《マカオ》である。夕方になり、香港から七・八十里の所に来た。香港の海門左右は、皆堅固な石で出来ており、夜中【の入港は海門への衝突の可能性があり】甚だ危険である。このため、蒸気機関の作動を緩め、漂漾(ひょうよう)して夜明けを待つ。夜明けに一人の中国人が来る。これは水先案内人である。波濤が静かで川の様である。

○寒暖計78度【25.6℃】○正午迄137海里○北緯21度○東経114度07分

旧暦万延元(1860)年9月09日(新暦10月22日)【9月10日】晴、東北の風。

今朝になって香港島に近づく。船の左右は皆島で、香港島は西にある。北は一面の山で堅固な岩で出来ている。ここは広東地方である。その距離の隔たりは、広い所で二・三里、狭い所で五・六町で、左右険しくそそり立った岩石である。その間を通過するので水先案内人を雇い、蒸気出力を緩め、且つ水深の深さを測り、始めは北に向って十五・六町進み、そこから少し西に方向を変えた。この辺りは所々に港の形を成して漁船がぎっしりと係留している。又、進むこと十二・三町で広東地方に一岬があり、城塞を築いてある。これは九竜城と言われている。ここを過ぎて十七・八町行った所で碇を下ろした。西南の山麓に数千の民家が軒を並べて立っている。南に沿ってネヒヤールト《海軍造船所》があり、又、岸から一・二町離れた所に一小島があり、そこに蔵庫を造営した。その他に、所々に浮砲台があり、非常に嚴重である。下碇は午後2時過ぎに終わったが、商船数艘が来て、数種の果物を持って来て売り、喧騒が甚だしい。何れも中国人で

立ち居振る舞いは日本人に似ている。夜午後 8 時頃に太鼓・小鼓を打ち、笛の音を合わせ、停泊の儀式を行う。

○寒暖計82度【27.8℃】○昨日正午よりここ迄85海里○北緯22度16分30秒○東経114度11分

旧暦万延元(1860)年9月10日(新暦10月23日)【9月11日】晴。

滞船【香港】。今日から石炭の積み入れをする。午前 8 時過ぎに官吏が上陸する。午後米国の中国駐在公使が来る。祝砲を発して饗応する。昨日から商船が入港して、混雑振りは言うに及ばない。このため、【入港は】一日に三度と定めた(朝・昼・晩)。商船にも決まりがあり、三艘以上の入港を許可しない。各々米国国旗を掲げさせる、これは日本の印鑑の類であろう。このため混雑すると言っても甚だしいものとはならない。停泊中の儀式はこの様であるべきである。そうでないと、水夫の者、商船に心を引かれ自分の職業を怠るのみならず、船中の混雑は推し量れなくなってしまう。これは小事であるが、航海者は知らなければならないものである。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年9月11日(新暦10月24日)【9月12日】曇。

滞船【香港】。今日、自分は新見正使の陪員として上陸した。午前 8 時頃小船に乗り、一里程して波止場に到着して上陸した。ここは石壇で出来ており高さは三段である。陸上の左側は空き地で物揚場であり、右には大きな家がある。建物は英風のレンガ作りで高さが三階、一階で諸品を売買している。大抵、英米の産物である。ここを過ぎ、一町ばかり行き右折すると中心街に出る。左右巨屋が軒を並べ、中国・英国・オランダの商人が雑商する。英国・オランダの店は大抵米国で見た様な物である。金銀類その他数種の物品を陳列している。中国の店は文房具類が多く、日本人の好む所が多いけれども、値段が非常に高く、簡単には購入できない。もっとも、貨幣単位が日本とは異なっており、香港では高くないと思われているものでも、日本人から見ると高いものとなっている。その中で値段が安い物は、古藤で作った紙(藤紙)、呉呂服、○の類である。散歩はすでに 3 時間に及ぶので、数十人の中国人が見物に群がり、自分等の装いを見ようとしている。英国の兵卒が傍らで棍棒を持って彼等をまるで犬馬の様に追い払う。これを見て甚だ心を痛める。或る人が言うには、中国人等は日本人が入港するのを疑い、もし米国と日本が密談してマカオを攻め入る企てではないかと、頻りに入港の理由を尋ねる者がいるとの事であった。但し、新聞紙に日本からマカオを攻めると言う記事が記載してあるのを見れば、その説が既にこの地に伝播している

と見える。誰の虚言であるのか、奇妙と言うべきである。【中国人達が】自分達日本人の長袖を見て昔を思い出し、悲憤慷慨して涙を流すものも居た。この土地に居る者達は、明朝の当時を思い出し・慕って、一朝事あればその機に乗じて蜂起したいと思っている。即ち、現在の北京の状態を想像してみればよい。又、英華書院《1818年英国人がマラッカに建てた中国人の宣教師養成施設で、1842年に現地へ移設された。》がある。日本にもその名が知られている学校なので、一時訪問しようとしたが、従臣の身なので自由にならず、終に行くことは出来なかった。或る人がここに行くことが出来たので、その話を聞くと、生徒は僅か三・四十人ほどで、極めて寂しいものであったとの事。遐邇(かじ)・六合叢談(りくごうそうだん)と言う中国の月刊雑誌を求めようとしたが、【尋ねられた中国人がそれらを】分らなかった。そうであるならば、英華書院の名を借りて他所で印刷したものと考えられる。以前に聞いていた評判とは大いに違っていたとの事である。書籍は少なく且つ値段が高い。自分は花英通語《英漢単語帳》一部を1ドルで購入したが、日本では銀一朱位の【価値の】本である。その値段の高いことは以て知るべしである。午後4時過ぎに帰船する。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年9月12日(新暦10月25日) 【9月13日】晴。

滞船【香港】。昨夜、オランダ船が一艘入港した。この船は長崎を出港し、六日ほどで香港に着いたとの事である。船長はトンクロ《ドンケル・クルティウス》と言ひ、長崎に数月《1852年出島のオランダ商館長として着任し、1857年に日本文典を記している。従って数月ではなく数年の間違ひである》居た者である。今日、ナイアガラ号に来て、御奉行等と会い、日本の近時の情勢を話し合った。午後4時過ぎに、この地に在住の米国婦人が来て船上で舞踏をし、夕方に帰った。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年9月13日(新暦10月26日) 【9月14日】晴。

滞船【香港】。午後2時過ぎに、英国の香港総督が来る。祝砲を鳴らして饗応する。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年9月14日(新暦10月27日) 【9月15日】晴。

滞船【香港】。今日、北京が落城《アロー号事件を口実として1857年、英国はフランスと協力して清国を攻め、1859年に天津条約を結んだが清国が批准を渋ったため、北京・天津を攻めて北京条約を認めさせた。その際、清国は北京を

すて熱河に逃れた》した事を聞く(巻八【10】参照)。或る説によると、咸豊帝(かんぽうてい)は宮女13人を連れていて英人に禁固され、現在頻りに和議を行おうとしているとの事である。又一説には、韃靼(だたん：モンゴル)へ遁走したと言う事である。又聞くところによると、咸豊帝は懦弱で、平日は女色に耽り、国家の事に意を使うことをせず、このために民心が離れて天命が尽き、民衆は英兵の乱入を幸いとして蜂起し、数ヶ月の間に終に落城した。これ自ら招き入れたもので、知者が居ると言っても如何ともすることが出来なかった。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年9月15日(新暦10月28日)【9月16日】晴。

滞船【香港】。事件の記すべきものが無い。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年9月16日(新暦10月29日)【9月17日】曇、時々小雨。

滞船【香港】。今日、日本の芸州【現在の広島県】出身の亀五郎と言う者が、先年漂流し米国人に助けられて現在香港に居るとの事。御奉行等が到着したという事を聞いて、喜んで帰国を願っていると言う事である。帰国を許され、ナイアガラ号に來た。当人の履歴を聞こうとしたが、陪従の人間が彼と接触・談話することを禁じられたので、ここに伝聞を記す。亀五郎は芸州因島(いんのしま)の出身で、嘉永年間(酉或いは戌の年。1849か1850年)に大阪から17人乗りで千六百石積みの船で酒等を積み入れて江戸に來た。その帰りに暴風に逢い、日本を離れて漂流すること一年余り、食料が尽きて船が破損し沈没寸前であった。幸いなことに米国船に出逢い、頻りに救助を求め、船を捨てて17人が全員米国船に乗り移り、漸く一命を取り留めた。それから四十日余り経って「サンフランシスコ」に上陸し、そこで船頭一人が病死した。一年ほどその場所に居たが、渡世の術も無いため、中国香港島に行けば何とかなるだろうとのことで、連絡便船に乗って香港に來て一年強居たが適する仕事無く、各自が自分の意思に任せてバラバラになった。亀五郎ともう一人が再び「サンフランシスコ」に戻り、厨房等の仕事をして月日を過ごしていたが、時折故郷を思い一途に帰国したいと思っていた。近頃同船に乗っていた彦蔵《播磨の人、浜田彦蔵。1850年海難に逢い米国船に救助されサンフランシスコに着く。帰化してJoseph Hecoと言う。米国領事館の通訳として活躍》等が日本に帰国したと言う事を聞き、帰国の願いが一層強くなって米国人に丁寧に帰国させて欲しいと懇願したが思う通りには行かなかった。今春連絡便船があると聞いて、厨房の仕事をして來たが、日本には行かずに香港島に來た。今帰国の願いを許された。何と言う幸せであろうか、これは天の助けで

あろうと言ったとの話である。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年9月17日(新暦10月30日)【9月18日】曇、夜快晴、東北の風。

午前8時頃碇を揚げる。始め東南に向かい、2時間程して漸く海門を出た。この港は前にも記述したが、左右皆堅固な岩で出来ており、大船の出入りが自由には出来ない。このため海門までは蒸気機関の作動を緩め、水先案内人を雇う。時は午後に及び漸く海門に来る。この所で水先案内人が別れを告げ、祝砲を發して去って行った。水先案内人の雇い賃は40ドルとの事である。ここから広東の陸地に沿って東北に向かい航行する。夕方、陸地が連連と見える。夜快晴、一天雲が無く、月光が玲瓏(れいろう：曇りが無く照り輝く様)としている。唯逆風で帆を揚げるが出来ない。

○寒暖計不試

香港情勢

香港島は広東の河口にある諸島の中の一島である。広東の地を離れること遠くは二・三里、近くは五・六町である。全島の長さは四里弱、広さ三里強に過ぎない。山は骨だった様に、堅固な岩が屹立して数種の奇形を形成している。大木は無く、青草が生えている。山で最も高いものは千八百二十五尺【548m】で、大平山と言う。山頂に英国の国旗を掲揚している。その山麓は皆市街になっており、南西に屈曲して軒が連なっている。大抵は英国風でレンガを積み、外壁は皆白漆喰を塗っている。その高さは三階建てに過ぎず、家には皆ひさしが有って木柱で支えている。又木造の家もあるがそれらは皆小さい家である。道路は縦横に通じており、大通りには必ず左右に樹木を植え、常時日光を遮っている。ここから少し南に行くと浮砲台とネヒヤールトがある。港内に浮砲台を四・五個備えている。その管理は非常に厳重であり、水深が深いため巨船と言っても接岸して碇を下ろす。今、近隣国の船が百余艘、隙間無く係留されていて、その繁盛振りが推し量られる。昔はうら寂しい所であったが、1840年間に【中国と英国間で】阿片戦争があり、中国がこの地を英国に割譲して和議を結んだ。それ以後、英国人が来て城塞や市街を造築し、万国と交易することを中国に認めさせ、更に、課金・運上等の制約の無いことを中国に認めさせた。このため、近隣国の船が引きも切らず来て日々に繁盛するようになった。現在では人家が山腹までぎっしりと建ち、学館・政官等全て備えている。1853年には人口39,017人とあり、現在では4万人を超えていることは疑いない。海門は東西にあり、西は諸島が碁石の様に点在し、往々浅い所があり大船が来往するのは難しい。東は少し南に向かい、北西には広東山を控え、

側にタムトク《Tathong》と言う名の一小島がある。香港との距離は僅かに五・六町であるが、水深が深く巨船が自由に来往出来る。このため、今回ナイアガラ号はここから入港した。海門内は所所に港の形を成し、その所には必ず漁家があり、小船が常に隙間無く係留されている。又、大平山から一里程離れた所の広東に一岬があり、城塞が築かれている。遠見には外郭にレンガを積み、砲台を設けてある。小さいけれども非常に堅固である。中国人はこれを九竜城と呼んでいる。今その情勢を見ると、広東第一の要所は、澳門《マカオ》・香港の二島であるが、澳門は蒲国《ポルトガル国》に奪領され、香港は英国の植民地となり、万一事があれば広東地方は容易に侵略される。この様な状態になって後悔しても、もう手遅れである。

風俗

諸国交雑の地であり、衣服は各自異なるけれども、その他は大抵中国風である。英、米、アラビア人の衣装は以前に述べた。中国人は多く筒袖服で前幅が脇下に達して、そこにてボタン或いは糸組で結んでいる。その長さは膝下或いは腰下に達する。股引は幅が広くて脛には脚絆を付けている。これは日本の小袴(こばかま)の様である。靴は革で作り、靴底の厚さは七・八分で、革で靴上を覆うようにしてあるか、或いは甲を覆うようにしてあり、一定していない。大抵金持ちは靴を履いている。貧乏人は草履或いは裸足である。女は男と同じであるが、袖は少し広い。頭は全髪を後で束ね、髪飾りには数種類ある。細い銅線をコオロギの羽の様に張ったり、分けて楕円に束ねたり、櫛で束ねたりしている。耳輪、腕輪、指輪はガラス或いは木実の類を用い、貧富に従って、大いに異なっている。その容貌は日本人の様で、食事には必ず箸を使用する。しかし、異装の者がいる。衣服は大抵英・米人と同じであるが、帽子は長くて後ろへ斜めに傾け、天辺が折れて内側に入り、又少し出ている。頭は左右の半分を剃って、その他は皆束ねている。日本の奴髪と言うものに似ている。色は少々黒く、身長は高くて衣服は最も美しく、たいそう威壯に見える。これはインドのボンベイの者で、当時は英国の植民地であり、その所の官吏等がここ香港で【英国人のために】働いていると言うことである。道路の往行には車を用いず、常に駕籠を用いている。これは山道が多いためであろう。その駕籠の作りは、高さ六・七尺、長さ八・九尺、駕籠の底から三尺程離れて左右に長さ一間程の竹の棒一本を刺し貫き、棒の下四面を板で囲み、棒の上の後面を板にして左右に簾(すだれ)を下げています。前面は出入口であり、常に布の幕を張っている。天井は皆板である。駕籠かきは皆中国人である。前後二人で担ぎ、日本の神輿の様である。商売人は座っている人も居るし、行商する人も居る。行商人は大抵天秤棒で荷物を担いでいる。商売人は疑い深くて狡

猾である。殊に道路に盗賊が多く、用心しないと担いでいる荷物といえども奪い去られるとの事である。且つ中国人は英国人に使われること犬馬の様で、汚い仕事や辛い労力仕事は全て中国人が行っている。これはまるで黒人の扱いと同じである。その地の出身で他国の人間に使われること、この様であり、傍観していても齒ざしりして止まなかった【無念でならなかった】。

気候

この香港島は、北緯22度16分30秒、東経114度14分45秒に位置し、寒暖が丁度具合の良い場所と思つたが、現在九月中旬であるが炎熱が甚だしく、寒暖計は85・6度前後である。胡瓜・スイカ・ナスが熟している。日本の【旧暦】六月頃の気候である。そうであれば年中温暖で、寒冷になることは少ないだろう。且つ、常に晴天が多く雨が少ない。四面は山で、時として山雲がむらがり、小雨が急に降ってきて炎熱を一掃する。

草木

草木が深く、探査することが出来ない。聞く所によると、荔枝《れいし：中国南部原産ムクロジ科常緑木。果実の種子は美味として賞味される。ライチ》、竜眼肉《中国南部原産ムクロジ科常緑木の果実の種子。これも食用及び薬用として珍重される。》、橙(だいたい)、柚子、梨、米、甘藷、芋、麻の類があり、一寸見たところでは、芭蕉実、スイカ、胡瓜、ナス、大根、ニンニク等があり、これらは船中に持ち込まれたものである。他に数種類の蔬菜が有るが、名前が分らない。禿山で大木が生えていない。大抵の樹木は他から移植したものであると言う事である。松・杉・竹・梅の類は見かけなかった。

鳥獸

鳥獸も船中に運ばれてきた物を見たが、鶏、アヒル、豚の類である。小鹿、サソリが居るとの事であるが、自分は見えていない。犬は日本の物に比べれば小さく、毛が長い。ツバメ、スズメ、カラス、トビの類は見えていない。

貨幣

英国本国から貨幣を輸入している。金・銀・銅貨があり、逐一調べることは出来ない。又外国の貨幣が通用する。殊に中国の銅銭が多く、当一文、当五十文の銭を見る。1ドルは中国の銅銭一貫文に相当し、日本の方銀は333文に相当する。中国の貨幣の価値は非常に低いと言うべきである。且つ、米国の金幣一円で90セントに相当する。五円で50セント減耗する。そうであれば、諸国の貨幣が相通

じて用いられるとしても、その土地により損益が有り、これは知っていなければならないことであろう。

物価

この島の物価は高く、米国の2倍である。唯、中国の物産中に日本よりやや安い物がある。下記に記す。

- | | |
|-------------------|---|
| 一 コップ六個 | 1ドル |
| 一 磁器六個 | 1ドル(大小により甲乙がある。自分が買ったのは小品である) |
| 一 藤紙一束 | 上は3ドル、中は1ドル半、下は1ドル(但し、1ドルは中国の錢一貫文に相当するので、上紙一束三貫文である。日本の銀二両一步に相当する。) |
| 一 呉呂服三尺 | 上は2ドル、中は1ドル、下は50セント(但し、日本の方銀で上品一両二歩二朱に相当する。中国では二貫文から五百文になる。) |
| 一 ○○八枚(長さ六七尺、幅四尺) | 1ドル (但し、中国の錢一貫文で日本の方銀三步に相当する。) |

旧暦万延元(1860)年9月18日(新暦10月31日) 【9月19日】曇、東北の風。

又東北に向う(北に向って僅かに1分東向き)。逆風で帆を揚げる事が出来ない。今朝になって、広東は何も見えなくなった。午後になって一天黒雲が群がり、大風雨が来るかと恐怖を抱いたが、夕方になって快晴となり、全員安堵する。夜、船の左舷半里程の所に一艘の船が見えた。夜中なので詳細は分からない。

○寒暖計83度【28.3℃】○正午迄175海里○北緯22度28分○東経117度

旧暦万延元(1860)年9月19日(新暦11月01日) 【9月20日】晴、北の風。

今朝から東南に向う。午前8時前からホルモサ島《Formosa》(台湾なり)が微かに見える。午前10時頃鮮明に見えてきた。正午頃島の南に沿って航行する。その距離は遠い場合で一・二里、近い場合で十町程である。さて、台湾等は北緯23度、東経120度前後で、南北245里、東西100里、人口250万人と言う事である。船中なので詳細は分からないが、山嶺は連々とし、樹木が繁茂している。その天に聳える山は、日本の富士山に似ている。又、海岸に小島が点在しており、青草がまるで座布団の様である。その昔、鄭成功《ていせいこう：中国明代末期から清朝初期の人物で、明朝の遺臣。明朝滅亡後清朝に抗戦して台湾に渡る。日本で

は近松門左衛門の「国姓爺合戦(こくせんやかっせん)」に出てくる国姓爺(こくせんや)として有名》が拠有(中心となって)して明朝の末裔を再興しようと計画した所であり、実に都合の良い要害の地である。その後中国の領土となり、幸いに人に奪領されることなく、今に至って人家の竈から煮炊きの煙が盛んに上がっているとの事である。ここを過ぎ、夕方にまた一小島を見る。タハコ島《Botel Tobago: 紅頭嶼のこと》と言う島であり、台湾から米国里標で二十里離れた場所である。ここを過ぎて直ぐに東北に向って航行する。今朝東南に向かったのは、暗礁を避けるためであったのだろう。夜になって天気晴朗、満天の星が爛々と輝く。波頭は静かで、川を渡る様な感じである。

○寒暖計83度【28.3℃】○正午迄168海里○北緯22度11分○東経120度15分

旧暦万延元(1860)年9月20日(新暦11月02日)【9月21日】晴、東の風。

又、東北に向う。風が弱くて帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関のみにて航行する。この辺りは炎熱が尚消えず、夜中と言っても裸で寝る。

○寒暖計83度【28.3℃】○正午迄170海里○北緯23度○東経122度55分

旧暦万延元(1860)年9月21日(新暦11月03日)【9月22日】晴、東の風。

又、東北に向う。横帆を揚げたので船足が少し速くなった。この辺りに来て波濤が高くなり、時々船が揺動する。夜はまた昨夜と同じである。

○寒暖計84度【28.9℃】○正午迄180海里○北緯24度13分○東経125度57分

旧暦万延元(1860)年9月22日(新暦11月04日)【9月23日】晴、東の風。

又、東北に向う。風波静かで海面は平らかである。未明から琉球列島が微かに見え、午前10時頃いよいよ鮮明に見えてきた。諸島が相続き、夕方になっても尚見えている。これは中山《ちゅうざん: 琉球の別名》・首里の諸島であろう。全て平山で樹木が繁茂している。日本人一行は皆故郷に帰ってきた気持ちになり、その喜び様は言葉に表わせない。全員船の傍らに立って島を眺め、指をさしたり話し合ったりして盛り上がっていた。夜午後8時頃になって漸くその地を通過した。

○寒暖計81度【27.2℃】○正午迄173海里○北緯26度13分○東経128度13分

旧暦万延元(1860)年9月23日(新暦11月05日)【9月24日】晴曇不定、北の風烈しい。

又、東北に向う。今朝、左舷に一小島が見える。薩南諸島であろう。この辺りは波頭が高く又風が強くて船が頻りに揺動する。夜になっても尚止まず、器

物が時として転倒し、破損する音が聞こえる。且つ俄かに寒冷となり綿入れを着る。夜半になり、寒冷が肌を刺すようになった。

○寒暖計74度【23.3℃】○正午迄181海里○北緯28度20分○東経130度37分

旧暦万延元(1860)年9月24日(新暦11月06日)【9月25日】晴曇不定、北の風。

又、東北に向う。風が少し止み、船の揺動が緩やかになった。今朝から横帆を揚げ、且つ蒸気機関を全開にしたため、船足は非常に速くなった。さて日本の海に来て波濤が非常に高くなり、【南アフリカの】喜望峰の海を思い起こさせる。しかし故郷が近いことを思えば、一行の喜びは甚だしく、波濤が強くともそこかしこに団欒し、帰国後の事を話し合い、談笑の声が夜半になっても尚止まない。数か月の航海の後、漸く日本に帰る。その喜び様は如何にも尤もである。

○寒暖計67度【19.4℃】○正午迄205海里○北緯30度33分○東経133度35分

旧暦万延元(1860)年9月25日(新暦11月07日)【9月26日】晴、北の風。

又、東北に向う。今日は波濤が少し静かで、船の揺動は烈しくは無い。午後になり左舷に一山が見える。雲間に陰しく聳え立っている。これは勢州《現在の三重県伊勢市》の浅間山である。夜午後8時頃から北風が激しくなり、船が揺動する。夜午前0時頃船を急に西に転じた。これは暗礁を避ける措置であるとの事である。2時間程で又東北に向う。寒冷がいよいよ甚だしくなり、綿入れ二枚を重ね着する。

○寒暖計64度【17.8℃】○正午迄190海里○北緯32度38分○東経136度28分

旧暦万延元(1860)年9月26日(新暦11月08日)【9月27日】晴、東の風。

又、東北に向う。午前8時過ぎ、豆州(伊豆)の七島が始めて見える。2時間程で益々はっきりと見え、一行は全員が喜び、或る人は眼鏡を用い、或る人は地図を調べて大いに心強くなってきた。夕方にその近辺を通過し、夜午後8時頃、宮田海(宮田海は浦賀から五・六里の距離)《神奈川県三浦市。久里浜の南、京急久里浜線三浦海岸駅近傍》に来て停泊する。これは海門暗礁の危険性があるためである。富士山を望むこと僅かの距離であるが、雲霧模糊として見えない。

○寒暖計65度【18.3℃】○正午迄145海里○北緯34度14分○東経138度43分

旧暦万延元(1860)年9月27日(新暦11月09日)【9月28日】晴、北の風。

今朝、北東に向い航行する。午前10時過ぎに浦賀港を通過し、正午に横浜港に入る。ここで暫らく停泊する。在住の米国人が数人来る。又、日本の咸臨丸の官吏が一人・二人来る。2時間程応接して午後4時過ぎに品川に入って碇を下

ろした(横浜から帰国の旨を知らせる官吏の従臣各一名を上陸させた)。さて千萬里外の航海をして、漸く帰国したので一行の喜びは限りないものである。大洋中未曾有の艱難辛苦を味わい、しばしば死を覚悟したことも有ったが、今にして思えば、夢か現か一行全員回顧して疑っている様子である。その心中察すべきである。夕方、官吏二人が来た。

○寒暖計64度【17.8℃】○昨日正午から品川迄80海里○北緯35度強○東経139度強

旧暦万延元(1860)年9月28日(新暦11月10日) 【9月閏28日】晴。

夜明けから荷物運搬で混雑を極める。午前8時頃、官船数十艘が装備して来た。各々番号が付いており、自分は御奉行に先んじて第一・第二の官船に乗り、荷物を監視して築地の講武場に行った。自分を迎えに来て待っていた者が数十人、岸頭に居た。大いに喜んで左右より集まり、袖を引いたり肩を叩いたりして帰国の喜びを言っていた。自分は一介の書生であるがこの様な喜び様であった。ましていわんや他の人は推して知るべしである。ここで昼飯を食べ、午後2時頃に官吏が各人自分達の地位に相応しい服装をしてその家に帰られた。嗚呼(ああ)、今回の航海、日本開闢(かいびやく)以来未曾有の事で、特に正月から九月まで僅か十ヶ月にして地球を一周して来たことは、万国でも稀有なことであるとの事である。さて、今日廿八日は、自分が付けてきた日記の順次を検討すると、廿九日に当たり、一日の差が出た。これは地球一周の間に、東方に太陽に向って航行するときに自ずから差が出るという事である。今、その理由を記述する。地球一周360度、一度を60ミニート(1時間《これは角度の60分のことで、1時間ではない。玉虫の誤解》)とすると、地球は昼夜左方に一転する。船舶が左方に太陽に向って航行するときは、経度一度につき「四ミニート」の余りが出る。これに360度を乗ずると1440となる。即ち、西欧の24時間である。ここで二日を兼ねて一日とし、余りを加える。又、右方に日に背いて航行する時は24時間を減少する。ここで一日を分割して二日となし、時間の減少を補う。今回の使節の旅は、地球と共に左方に向って航行した。このため、一日の剰余が生じた。地球の子午線を通過する時は、その日の増減することを定法とする。そのため、米国は英国ロンドン市に基づき午線を定め、北太平洋東経180度の所で日の増減をする。日本の国で行うときは、ロンドン市西経42度の所、此処は午線である。自分は此処で【日を】増減すべきであるけれども、初めての航海であり、その理由を知らなかったので、唯、日を追って事を記し、帰国後、日本の暦に合わせて漸くその差があるのを知った。このため、今日廿八日を閏とした。閏を加える方法は、午線を通過する、午前であればその日を閏とし、午後であれば翌日を閏とする。これは定法である。自分は暦学に暗く、今回の航海同行中、一人非常に良く知っているものが居て、

今その人にその説明を受けた。その詳細については、専門家を待つのみである。

海陸里数

- 【01】日本よりサンドウィッチ島まで、日本里で1911里26町余、米国海里で4071里。
- 【02】サンドウィッチ島からサンフランシスコ港まで、日本里で1001里7町、米国海里で2132里。
- 【03】サンフランシスコ港からパナマ港まで、日本里で1630里16町、米国海里で3472里。
- 【04】パナマ港からワスペンフルまで、日本里で19里12町半、米国海里で47里半。
- 【05】ワスペンフル港からワシントン市まで、日本里で1092里27町、米国海里で2327里。
- 【06】ワシントン市からポールトモルまで、日本里で20里13町、米国陸里で50里。
- 【07】ポールトモルからフィラデルフィアまで、日本里で40里11町半、米国陸里で99里。
- 【08】フィラデルフィアからソートアンホーキまで、日本里で26里2町半、米国陸里で64里。
- 【09】ソートアンホーキからニューヨークまで、日本里で14里3町、米国陸里で30里。
- 【10】ニューヨークからシントヴィンセント島まで、日本里で1434里31町、米国海里で3055里半。
- 【11】シントヴィンセント島からルアンダ港まで、日本里で1437里24町、米国海里で3061里半。
- 【12】ルアンダ港からジャワ港まで、日本里で3709里28町、米国海里で7902里半。
- 【13】ジャワ港から香港島まで、日本里で890里19町、米国海里で1897里。
- 【14】香港島から江戸まで、日本里で782里20町、米国海里で1667里。

総計で海の距離は日本里で13906里(米国海里で29615里)、陸の距離は日本里で106里2町(米国陸里で260里半)である。米国の里法6086フィートは海上の1里である。5280フィートは陸上の1里である。

但し、1フィートは日本の一尺0寸0分2厘7毛で、六尺が一間、六十間が一町として参考に算出した。

正使及び属官・従臣の姓名

- 【01】正使 外国御奉行 新見豊前守(正興)
 従臣 三浦司 新井貢 佐山八郎 安田善一郎
 堀内周吾 柳川兼三郎 荒木数右衛門 玉虫左太夫
 日田仙蔵
- 【02】副使 外国御奉行 村垣淡路守(範正)
 従臣 高橋森之助 野々村市之進 西井金五郎 吉川謹次郎
 綾部新五郎 松山吉次郎 福村礒吉 谷文一郎
 鈴木岩次郎
- 【03】御目付 小栗豊後守(忠順)
 従臣 吉田好三 塚本真彦 江幡祐三 三好権三
 福島恵三郎 三村広三郎 木村鉄太 佐藤藤七
 木村浅之助
- 【04】御勘定組頭 森田岡太郎
 従臣 広瀬格蔵 石川鑑吉 狩野庄蔵 三浦東三
 五味安郎右衛門
- 【05】外国御奉行組頭 成瀬善四郎
 従臣 北条源蔵 山田馬次郎 平野新蔵
- 【06】外国御奉行調役 塚原重五郎
 従臣 島東西八 谷村左右助
- 【07】御徒目付 日高圭三郎
 従臣 伊藤久三郎 庵原熊蔵
- 【08】御徒目付 刑部(おさかべ)鉄太郎
 従臣 佐藤栄蔵 小池専次郎
- 【09】御医師 宮崎立元
 従臣 斎藤吾一郎
- 【10】御医師 村山伯元
 従臣 大橋金蔵
- 【11】御普請役 益頭(ますず)駿次郎
 従臣 佐野鼎輔
- 【12】御普請役 辻芳五郎
 従臣 中村新九郎
- 【13】外国御奉行定役 松本三之丞
 従臣 大浜玄之助
- 【14】外国御奉行定役 吉田佐五左衛門
 従臣 岸珍平

- 【15】通詞 名村五八郎
 従臣 片山友吉
- 【16】御小人目付 栗島彦八郎
 従臣 坂本泰吉郎
- 【17】御小人目付 塩沢彦次郎
 従臣 木村伝之助
- 【18】通詞 立石得十郎
- 【19】通詞御雇 立石斧次郎
- 【20】御雇医師 川崎道民
 従臣 島内栄之助
- 【21】御賄方御用達 岡田平作手代
 山本喜三郎 加藤素毛 佐藤恒蔵 飯野文蔵
 半次郎 鉄五郎

総計七十七人

【卷七 終】